



城沼

日本の源流 再発見

File 37 群馬県館林市

「里沼 (SATO-NUMA)」の沼辺文化が日本遺産に

館林市はその地形から多くの沼が存在し、いにしえより人々の暮らしと深く関わってきました。なかでも茂林寺沼・多々良沼・城沼は、それぞれが独自の文化を創出。人と沼の共生によって育まれた沼辺の文化は、「里沼 (SATO-NUMA)」の物語として、日本遺産に認定されました。



「里沼」と共生する歴史深き城下町、館林

日光連山、筑波山などの山々や、富士山までも一望できる館林市は、渡良瀬川と利根川に挟まれ、それら河川の浸食によって低地と台地が入り組んだ地形に、いくつも沼が点在していました。開発が進み、関東平野から沼が消え去りつつある現在でも、館林には水鳥たちが伸びやかに羽ばたき、羽を休める大小の沼が存在しています。

数ある沼の中でも、「茂林寺沼」^{もりんじぬま}「多々良沼」^{たたらぬま}「城沼」^{じょうぬま}の3つの沼は、人々の暮らしに深く結びついた「里沼」として、沼辺ならではの独自の文化を築いてきました。館林の「里沼」は、その沼ごとに磨き上げた沼辺文化の物語を今に伝える、希少な文化遺産です。

葦^{あし}が群生し、迷路のような散策路が続く「茂林寺沼」は、里沼らしい原風景を残しながら、信仰と結びついた「祈りの沼」。茅葺^{かやぶ}き屋根の本堂をもつ茂林寺は、人々の信仰の拠点となり、お伽噺^{とぎばなし}『分福茶釜^{ぶんぶくちやがま}』の寺としても親しまれてきました。寺が屋根^ふの葺き替えに沼の葦を利用し、葦を刈ることによって沼の生態系が守られ、「茂林寺沼」は里沼として、人との共生を保ち続けてきました。

徳川四天王の一人である榊原康政^{さかきばらやすまさ}や、のちに五代将軍となる徳川綱吉が城主を務めた館林城。城の南側に細長く広がる「城沼」は、館林城を囲む外堀の役目を担い、武将たちにとって「守りの沼」となりました。そして「守りの沼」に



▲ 茂林寺

茂林寺は、茶釜に化けたたぬきが福を与えたという『分福茶釜』の舞台としても有名な寺。参道に並ぶ愛らしいたぬぎ像が参拝客の心を癒やします



▲ 竜の井

「竜の井」は、城沼に棲む龍神の妻が、当時ここに存在していた善導寺を守るため、境内の井戸に姿を消したという伝説が、その名の由来とされています

▼ 旧秋元別邸

季節の花々に彩られ、和風建築と洋館の調和が美しい歴史的な建物は、館林藩最後の藩主となった秋元家がかつて所有していた別邸です



▲ 青龍の井戸

徳川綱吉が城主の頃、福寿院境内の井戸の中から、突然女官姿の青龍権現が出現したという言い伝えがあり、「青龍の井戸」と呼ばれるようになりました



はいくつかの伝説も語り継がれています。その一つである龍神伝説によると、「城沼」は沼に人を寄せつけないため、沼の主である龍神の棲みかとなったそうです。その伝説の井戸(竜の井・青龍の井戸)は今も市中に残されています。

江戸時代には里人が近づくことのできなかった「守りの沼」(城沼)は、明治時代になると開放され、現在では、散歩やジョギングを楽しむ、市民の憩いの場となっています。また、緑豊かなつつじが岡第二公園内には、館林藩最後の藩主となった秋元家が使用していた別邸(旧秋元別邸)が、人々を見守るように静かにたたずんでいます。

「里沼」と共に育まれた館林の沼辺文化は、歴史と深く関わり合いながら、今も町の至るところに往時の足跡を残しています。自然豊かな沼辺を散策しながら、人と沼が紡いだストーリーをたどってみてはいかがでしょうか。

ココに
注目



寛永年間創業の「三樹家総本舗」は、かつての藩主・秋元家の御用菓子舗を務め、館林城主へも献上した由緒ある老舗和菓子店。群馬特産の大麦を用いて上品な甘さに仕上げられた、香り豊かな麦落雁は、今もなお人々に愛され続けています。

日立グループ事業所紹介

今回訪れた群馬県には日立オートモティブシステムズ株式会社 群馬工場があります。パワートレインシステムや車両統合制御システムをはじめ、自動車関連機器・システムの開発、製造、販売およびサービスを行っています。

日立オートモティブシステムズ株式会社 群馬工場

群馬県伊勢崎市粕川町1671番地1

<https://www.hitachi-automotive.co.jp/>